

2012年台湾立法委員選挙情勢

東京外国語大学

小笠原 欣幸

2012年1月14日、台湾で総統選挙（大統領選挙）と立法委員選挙（国会議員選挙）のダブル選挙（同日選挙）が行なわれる。立法委員選挙は注目度の高い総統選挙の影に隠れているが、立法院の議席数は総統選挙と同じかそれ以上に重要な意味を持つ。台湾の憲法体制においては、総統の権限はアメリカの大統領ほど強くはなく、立法院で過半数を握らないことには法案も通過しないし政権運営も行き詰まる。議席数については前回圧勝した国民党が大幅に減らすのは確実で、どのあたりで踏みとどまるのか、単独で過半数の57議席を確保できるかが注目点である。今回の立法委員選挙は、日本と類似する小選挙区比例代表並立制が導入されて2回目の選挙となる。台湾の選挙民がこの制度をどのように活用するのか、それも注目点である。初めて総統選挙とのダブル選挙となったことがどのような影響を及ぼすのかも含め、本稿では2012年台湾立法委員選挙の見どころについてシミュレーションを交え解説したい。

1. 前回選挙の結果とその後

前回の2008年立法委員選挙は、台湾において小選挙区比例代表並立制が実施された最初の選挙であった。選挙民は、選挙区で1票、比例区で1票を投じる。選挙民が原住民の身分証を有している場合は、原住民選挙区で1票、比例区で1票を投じる。結果は、周知の通り、国民党が81議席を獲得し圧勝、民進党はわずか27議席の惨敗となった。国民党の議席占有率は72%に達し、馬英九の総統当選と合わせて、まさに「完全執政」が実現したのである。しかし、政権の発足とほとんど同時に馬英九総統の満足度（支持率）は低下し始め、加えて選挙違反で起訴される国民党の立法委員が相次ぎ、国民党に対する選挙民の視線は厳しくなった。

《表1》2008年立法委員選挙結果(議席数)

	民進党	国民党	親民党	無党籍	合計
選挙区	13	57	0	3	73
原住民	0	4	1	1	6
比例	14	20	0	0	34
合計	27	81	1	4	113

《表2》2008年立法委員選挙結果(得票率%)

	民進党	国民党	親民党	無党籍 その他
選挙区	38.65	53.48	00.02	07.85
原住民	06.76	54.89	17.47	20.88
比例	36.91	51.23	00.00	11.86

出所: 中央選挙委員会資料を参照し筆者作成。

2008年以降、《表3》のように13名の立法委員が失職あるいは辞職したことにより補欠選挙が実施された。うち10名が国民党籍である。国民党は10議席が3議席に減少、民進党は3議席が9議席に増加した。他に無党籍の候補が1議席獲得した。それぞれの選挙区ではローカルな要素が作用したが、共通の要因として、馬英九政権の不人気、そして国民党の集票機能の低下を指摘できる。また、立法院で圧倒的多数を占める国民党議員団が国民生活の改善にどのように寄与しているのかよくわからないという感覚もある。一連の補

欠選挙において、都市部でも農村でも、台湾の選挙民は馬英九と国民党に対し強い不満を表明した。2012年立法委員選挙は国民党にとって逆風の中での戦いとなった。

《表3》2008年以降の立法委員補欠選挙

投票日	選挙区	2008年当選	補選当選	補欠選挙の理由
2009年3月14日	苗栗県第1	国民党	無党籍	国民党の李乙廷が選挙違反で当選無効判
2009年3月28日	台北市第6	国民党	国民党	国民党の李慶安が二重国籍問題で辞職
2009年9月26日	雲林県第2	国民党	民進党	国民党の張碩文が選挙違反で当選無効判
2009年12月5日	南投県第1	国民党	国民党	国民党の吳敦義が行政院長就任のため辞職
2010年1月9日	桃園県第2	国民党	民進党	国民党の廖正井が選挙違反で当選無効判
	台中県第3	国民党	民進党	国民党の江連福が選挙違反で当選無効判
	台東県	国民党	民進党	国民党の黄健庭が県長選挙出馬のため辞職
2010年2月27日	桃園県第3	国民党	民進党	国民党の吳志揚が県長当選により辞職
	新竹県	国民党	民進党	国民党の邱鏡淳が県長当選により辞職
	嘉義県第2	民進党	民進党	民進党の張花冠が県長選挙出馬のため辞職
	花蓮県	国民党	国民党	傅岷萁(国民党除名)の県長当選による辞職
2011年3月5日	台南市第4	民進党	民進党	民進党の賴清徳が市長当選により辞職
	高雄市第4	民進党	民進党	民進党の陳啓昱が副市長に就任のため辞職

出所:中央選挙委員会資料を参照し筆者作成。

2. 同日選効果とねじれ投票

総統選挙・立法委員選挙のダブル選挙は初めてのことなので、これがどのような効果を生かせるのか予測は難しいが、理論的には総統選挙の投票行動が選挙区の立法委員の得票に影響を及ぼす事例がある程度発生すると考えられる。例えば、前回



選挙のデータでは、立法委員選挙に関心がない（棄権する）が総統選挙は関心がある（投票に行く）選挙民は、全有権者の約18%存在する。ダブル選挙となったことで、この18%の選挙民のある程度の割合の人にとっては、総統選挙の投票行動が主で立法委員候補の選択はそれに付随すると考えられる。例えば、蔡英文に入れると決めた選挙民が選挙区でも民進党候補に入れる事例がそれにあたる。これを「同日選効果」と呼ぶ。

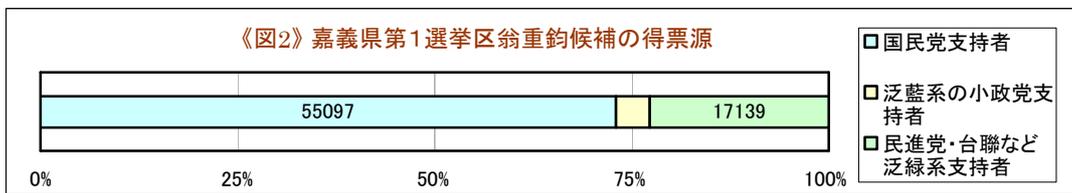
他方、筆者の調査では、立法委員選挙の選挙区の1票、比例区の1票、総統選挙の1票の計3票を使い分ける「ねじれ投票」（台湾では「分裂投票」と呼ばれる）が各地で発生すると考えられる。《図1》のように、緑陣営の支持者で、総統選挙は蔡英文に入れるが選挙区は付き合いのある人から頼まれ国民党候補に入れるというのが「ねじれ投票」の一例である。逆の場合もある。「ねじれ投票」は実は前回選挙でも発生している。選挙区の政党公認候補が比例区の当該政党票を一定程度上回ったケースがそうである。

《表 4》は前回の嘉義県第 1 選挙区の事例である。比例区の政党得票率を見ると国民党は 43.72%にすぎないのに選挙区の翁重鈞候補は 57.47%もの得票率をあげている。差は 13.75 ポイントである。票数で言うと、翁重鈞の得票数は 75489 票、比例区の国民党の得票数は 55097、差は 20392 票となる。比例区の新党、台湾農民党、無党団結聯盟の票は泛藍系であり翁候補に投票するのは自然なのでこれら 3 党の得票数の合計 3253 票を差し引くと残りが 17139 票となる。この票は比例区で民進黨または台聯に入れた泛緑の支持者が投じたものである。この部分が「ねじれ投票」の数である。整理すると、翁重鈞の得票のうち国民党支持者から来た割合が 73%、泛藍系小政党の支持者からが 4.3%、泛緑の支持者からが 22.7%となる《図 2》。

《表 4》嘉義県第 1 選挙区の得票率の比較

	民进党	国民党	無党籍その他
選挙区	42.53%	57.47%	0.00%
比例	45.34%	43.72%	10.94%
総統選挙	55.25%	44.75%	0.00%

出所: 中央選挙委員会資料を参照し筆者作成。



2 ヶ月の間隔で実施された総統選挙と比べることもできる。嘉義県第 1 選挙区で馬英九の得票数は 65073 票、得票率は 44.75%であった。翁重鈞は得票率ではそれを 12.72 ポイント上回る。驚くべきことに、翁重鈞の得票数は馬英九の得票数を 10416 票も上回った。

前回の事例を台湾全体のレベルで検証すると、表面的には国民党の比例区得票率と馬英九の得票率、あるいは、民進黨の比例区得票率と謝長廷の得票率との間に差があるが、国民党、新党、無党団結聯盟、農民党、紅党、客家党を合計して泛藍陣営の得票率を算出すれば馬英九の得票率とほぼ一致するし、民進黨、台聯、第三社会党、緑党を合計して泛緑陣営の得票率を算出すれば謝長廷の得票率とほぼ一致する。したがって、立法委員選挙比例区の両陣営の得票率と総統候補の得票率との間には「ねじれ」はほとんどなかったと結論づけることができる。「ねじれ投票」の規模をより正確に測るためには、比例区の小政党の得票率を泛藍陣営と泛緑陣営に分類した数字を用いた方がよいが、新党と台聯だけを算入するか他の政党も算入するか研究中なので、本稿では総統候補の得票率で代用する。

前回選挙での「ねじれ投票」の概況を把握するため、選挙区において所属政党の総統候補の得票率を上回る幅が大きい候補者の上位 10 名のリストを両党について作成した。それが《表 5》である。「ねじれ」を起こすことができる候補者は、人間関係・組織関係・利益関係などにより投票者に直接働きかけることができる、あるいは、イメージ・評判により政党を超えた支持を獲得できるという条件を備えていると考えられる。両党とも上位に入った候補者は長年選挙区で活動してきた人物が多い。ただし、国民党では「ねじれ」を起こした候補者は 10 名のうち 9 名が当選しているのに対し、民進黨では当選したのはわずか 1 名である。これは前回選挙が国民党に有利な環境であったことが第一の原因と考えられるが、両党の候補者の票固めの手段の違いを意味するかもしれないので今後調査したい。

《表 5》 立法委員選挙区候補の得票率が総統候補の得票率を上回った選挙区

	国民党の上位 10			民進党の上位 10		
	選挙区	候補者	差	選挙区	候補者	差
1	嘉義県第 1	翁重鈞	12.72	苗栗県第 1	杜文卿	6.56
2	雲林県第 1	張嘉郡	8.27	花蓮県	盧博基	6.36
3	高雄市第 2 (旧高雄県第2)	林益世	7.85	台北県第 8	趙永清	6.30
4	高雄市第 1 (旧高雄県第1)	鍾紹和	5.92	台中市第 1 (旧台中県第1)	蔡其昌	5.15
5	台中市第 8 (旧台中県第四)	徐中雄	5.61	桃園県第 2	郭榮宗	4.99
6	台南市第 1 (旧台南県第1)	洪玉欽	3.98	桃園県第 3	彭添富	4.14
7	屏東県第 2	王進士	3.72	台南市第 4 (旧台南市第2)	賴清徳	4.12
8	南投県第 1	呉敦義	3.15	台北県第 5	廖本煙	4.11
9	宜蘭県	林建榮	1.71	台中市第 7 (旧台中県第3)	簡肇棟	4.10
10	基隆市	謝國樑	1.44	台北県第 4	呉秉叡	3.71

注:背景色は当選を示す。 出所:中央選挙委員会資料を参照し筆者作成。

《表 5》の候補者のうち国民党は 7 名, 民進党は 3 名が今回も同じ選挙区で出馬している。うち, 国民党の上位 4 名の翁重鈞, 張嘉郡, 林益世, 鍾紹和の選挙区は総統選挙では蔡英文が優勢と考えられる。「同日選効果」と「ねじれ投票」とのせめぎ合いが注目点となる。全体としてダブル選挙がどの党に有利なのかは一概に言うことはできない。「同日選効果」と「ねじれ投票」がどういう形で出現するかは選挙区によって異なり, その効果は選挙区ごとに論じるしかない。

3. 得票率のシミュレーション

さて, 今回の 2012 年立法委員選挙の情勢を日本の読者にわかりやすく解説するため, あえて単純化したシミュレーションを提示する。まず, 全 73 の選挙区情勢についてである。過去の選挙データ, 各種民意調査, 政党関係者からの聞き取り調査を参考にし, 今回の選挙区選挙は前回選挙結果と比べて国民党候補の得票率は平均 4 ポイント低下, 民進党候補の得票率は平均 4 ポイント上昇すると想定する。加えて, 前回 13 名の候補を擁立し全体で 0.96%の得票率をあげた台聯が今回は候補を立てないので, 前回台聯の候補に投票した選挙民は今回民進党の候補に投票すると考えられるので民進党の想定得票率にその分の 1 ポイントを追加する。また, 前回は台湾本島で候補を立てなかった親民党が今回 10 名の候補を擁立したので, 親民党の選挙区全体における得票率を 1%と想定し, その分を国民党の想定得票率から差し引く。これらを合わせると, 各選挙区で国民党候補の得票率から 5 ポイント減らし, 民進党候補の得票率に 5 ポイント加えた数値が今回の両党の候補者の得票率の目安となる。

次に, 比例区については次のようにシミュレーションをした。民進党は比例区で前回の得票率 36.91%から 4.5 ポイント程度上昇(計算上+4.59)の潜在力があると見込んで 41.5%と想定する。国民党は比例区で前回の得票率 51.23%から 4.5 ポイント減(計算上-4.59)と見込んで 46.64%と想定する。前回は二大政党以外の諸小政党は合計で 11.86%の得票率があった。うち, 新党は前回 3.95%を得たが今回は埋没気味で親民党の影響もあるので 2.5%

と想定する。台聯は前回 3.53%を得たが今回は埋没気味なので 2.5%と想定する。

その他の小政党の得票率パターンは前回の諸小政党のパターンと同様、また、緑党はわずかに上昇すると仮定し、緑党 0.8%、人民最大党 0.5%、台湾主義党 0.3%、台湾国民会議 0.8%、中華民国台湾基本法連線 0.3%、健保免費連線 0.3%と想定する。これらの合計は 3%となり、新党と台聯を加えた諸小政党を合計すると 8%となる。前回の諸小政党の合計 11.86%との差 3.9（計算上は 3.86）は親民党に回ると想定する。さらに、親民党は国民党支持者から票を取るため、国民党から親民党への流出を 3 ポイント程度（計算上 3.14）と見込んで国民党の想定得票率 46.64%から 3.14 を引いて 43.5%とする。国民党の得票率は前回から 7.7 ポイント減少する想定となる。親民党の得票率は、前回の比例区の国民党支持者から 3.1 ポイント、諸小政党支持者から 3.9 ポイントを得て合計 7%と想定する。このシミュレーションでは、民進黨 15 議席、国民党 16 議席、親民党 3 議席、その他小政党は議席ゼロとなる。

比例区での各党の得票率を基礎票と見て
総統選挙の方向性を考えることもできる。

例えば、蔡英文は民進黨 41.5+台聯 2.5+
その他諸小政党 1.5=45.5 が目安となる。

馬英九は国民党 43.5+新党 2.5+その他諸
小政党 1.5=47.5 が目安となる。宋楚瑜は

親民党の 7 が目安となるが、死票にしたくない選挙民もいるのでそれより多少低くなる可能性がある。例えば、0.5 ポイントずつ蔡と馬に流れて、蔡 46、馬 48、宋 6 という数字も考えられる。最後はいずれかの候補者に基礎票を上回る個人的魅力があるかどうかということになる。例えば、蔡に 1 ポイント上乗せする魅力があれば蔡 47、馬 47、宋 6 となるし、馬に 1 ポイント上乗せする魅力があれば蔡 45、馬 49、宋 6 となる。

《表 6》 シミュレーション (%)

	民進黨	国民党	親民党	無党籍その他
選挙区	43.5	48.5	1.0	7.0
比例	41.5	43.5	7.0	8.0

注:これは単なるシミュレーションです。

4. 選挙区的情勢

選挙区で民進黨+5、国民党-5 というシミュレーションは議席ではどのような影響になるのだろうか。小選挙区制で 10 ポイント程度のスイングが発生すれば議席の変動はかなり大きく与野党逆転となっても不思議はないが、今回の立法委員選挙では必ずしもそうならない可能性がある。その理由は二つある。一つは地域の差異により、北部の国民党現職の多くは 10 ポイント程度のスイングでもまだ余裕がある。二つ目の理由は、このスイングによって藍から緑に転じる選挙区においても国民党現職が善戦していることである。これらの現職の多くは政党の看板より個人の組織票に依拠しているので、「ねじれ投票」によりスイングの幅が抑えられる傾向にある。

個々の選挙区情勢については「2012 年台湾立法委員選挙選挙区情勢」を作成したので参照していただきたい (<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogawara/analysis/Lelection2012constituencies.pdf>)。

「選挙区情勢」の評価の方法は次の通りである。①筆者のシミュレーションを使い、前回選挙の国民党候補の得票率から 5 ポイント減らし、民進黨の得票率に 5 ポイント加えた数値を今回の両党の候補者の得票率の目安とする。②2009 年県市長選挙・2010 年五都市長選

挙の数値を各選挙区の両党の得票率に換算し①と比較対照。③新聞報道および関係者の話を総合して各候補の強さ・弱さを比較検討。④さらに「同日選効果」および「ねじれ投票」の可能性を検討。これらを総合的に判断し、「安定した戦い」、「リード」、「わずかにリード」（逆転の可能性あり）、「五分五分」の4段階の評価にまとめた。これは、現職が再選を目指す選挙区がモデルであり、無党籍候補が影響を及ぼす選挙区、前回と構図が異なる選挙区は別途検討した。

これらを分類したものが《表7》、議席数のシミュレーションが《表8》である。シミュレーションなので最小と最大にかなりの幅がある。さらに絞り込みたい人は中間値を見るとよいであろう。国民党は前回と比べて議席を大幅に減らすものの過半数を維持する可能性が高い。しかし、五分五分の大接戦の選挙区が9つ、国民党または民進党のリードがわずかな選挙区は16あり、これらを合わせた流動的な選挙区は25にのぼる。最後の数日間、風がどう吹くかで議席数には大きな変動が生じる。国民党は、最後に逆風が強まれば過半数の57議席を割り込むし、追い風となれば立法院の各委員会で召集人（委員長）ポストを確保できる安定多数に手が届く。立法委員の定数が半減されたことで1議席は非常に重くなった。情勢はまだ流動的である。（2012.1.5記）

《表7》73選挙区の情勢分類（2012年1月3日現在）

情勢評価	選挙区	議席
国民党安定またはリード	台北1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 新北1, 6, 8, 9, 10, 11, 基隆, 桃園5, 6, 新竹県, 新竹市, 苗栗1, 2, 台中3, 5, 南投1, 彰化2, 3, 4, 雲林1, 嘉義1, 高雄2, 3	30
国民党わずかにリード	桃園1, 3, 4, 台中4, 南投2, 屏東2, 花蓮	7
五分五分	新北4, 5, 7, 嘉義市, 高雄1, 8, 9, 金門, 連江	9
民進党わずかにリード	台北2, 新北3, 12, 台中6, 彰化1, 高雄6, 7, 宜蘭, 台東	9
民進党安定またはリード	新北2, 桃園2, 台中1, 7, 8, 雲林2, 嘉義2, 台南1, 2, 3, 4, 5, 高雄4, 5, 屏東1, 3,	16
無党籍リード	台中2, 澎湖	2

出所：筆者整理

《表8》シミュレーション

	民進党		国民党		無党籍その他		親民党	
	最小	最大	最小	最大	最小	最大	最小	最大
選挙区	23	34	34	47	2	4	0	2
原住民	0	0	4	5	1	1	1	2
比例	15	16	15	17	0	0	2	3
合計	38	50	53	69	3	5	3	7

注：これは単なるシミュレーションです。

